

弘

○思い出は小さくため息つく臍  
○薄氷をあるだけ踏んで無戸籍児  
学芸会いつも脇役いぬふぐり

夕子

○いぬふぐり言ひたいやうに言はしとく  
ベンチにはもう先客やいぬふぐり  
北山を煙らせ土佐に春の雪

丞子

○雛段の段の裏から「まーだだよ」  
薄氷<sup>かけひ</sup>笥の水の行き止り  
犬ふぐり散歩の犬も小型犬

さえ

○立春の風にも言う小鳥かな  
○水の音少し離れて薄氷  
遠足や避けて<sup>いそ</sup>蘆敷く犬ふぐり

文子

○薄氷軽く杓あて動かせり  
○雪団子持ち片手漕ぎする女学生  
いぬふぐり膝折り青を楽しまん

郁子

春一番<sup>とも</sup>伴はいらぬぞ黄砂など  
犬ふぐり母の心にある光  
白梅の空<sup>く</sup>切る枝の一直線

農子

○交叉点の白線薄し春浅し  
粉鼻にクッキー作り犬ふぐり  
ハミングのイヴ・モンタンや雪が降る

えり

○いぬふぐり咲いて一日ありがたく  
星まばら風の残せし薄氷  
春の雲梢高きに停まりをり

千代

○春昼の川辺に届く山羊の声  
鳴り渡る下校のチャイムいぬふぐり  
早逝の友の墓石に薄氷

富江

群がって線路脇へと犬ふぐり  
薄氷は朝日に揺れて君と揺れ  
投げ釣りのだれかれの声二月尽

樹

○薄氷や室戸の海はもう青い  
茶のティディベアゆらゆらと日向ぼこ  
早春の星の瞳や八幡浜

味元 昭次 作品

薄氷にうすうす映る明後日  
父祖たれも地を這うて来し犬ふぐり  
薄氷に月光沁みる母の村

